児童における3タイプの攻撃性が正負感情に及ぼす影響^{1),2)}

勝 間 理 沙
兵庫教育大学大学院

山 崎 勝 之
鳴門教育大学

本研究では、攻撃性について、反応的表出性攻撃、反応的不表出性攻撃および道具的関係性攻撃の3分類を用い、児童における3タイプの攻撃性から正負感情への影響を検証した。小学校4年生～6年生718名を対象に、日本語版児童用正負感情尺度とP-R攻撃性質問紙を行った。その結果、不表出性攻撃の高い児童は低攻撃児よりも高いネガティブ感情を示したが、表出性攻撃児および関係性攻撃児においてはネガティブ感情との関係は見られなかった。この結果は、先行研究を支持するものであり、不表出性攻撃児の問題性をさらに強調し、将来の抑うつ対するネガティブ感情によるスクリーニングの可能性が論議された。

キーワード：反応的表出性攻撃、反応的不表出性攻撃、道具的関係性攻撃、正負感情

問題と目的

児童生徒を取り巻く心身の適応・健康問題における重大な要因として、攻撃性を扱った研究はこれまで数多くなされてきた(Crick, 1997; Crick & Grotpeter, 1995; Khatri, Kupersmidt, & Patterson, 2000; Quiggle, Garber, Panak, & Dodge, 1992)。なかでも、発達・健康領域における攻撃性研究では近年、その概念を細分化する傾向が見られる。これは、細分化することによって、その理論的価値のみならず、それぞれの攻撃性に対応した予防的(治療的)介入をもたらすと考えられるからである(Vitiello & Stoff, 1997)。その分類方法として、大きく反応的攻撃(reactive aggression)と道具的攻撃(proactive aggression)³⁾の2つに分ける分類

方法(Dodge & Coie, 1987)が広く用いられてきた。さらに山崎ら(坂井・山崎, 2003, 2004a, 2004b; Yamasaki & Nishida, 2007)は、反応的攻撃を表出性攻撃(expressive aggression)と不表出性攻撃(inexpressive aggression)に分け、道具的攻撃を、反応的攻撃の要素をより含まない、関係性攻撃(relational aggression)で代表させるという細分化を提唱している。また、これらの3タイプの攻撃性は、攻撃行動としてではなく、安定した個人特性として捉えられ(山崎, 2002)、これらの細分化に対応した、質問紙測定法も開発されている(坂井・山崎, 2004b)。

これらの3つの攻撃性はそれぞれ独自の性質をもち、生じる問題も様々であることが分

1) 本研究は、日本健康心理学会第18回大会(神戸女学院大学)において発表した。

2) 本研究に際して、数多くの小学校教員ならびに児童皆様のご協力頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

3) proactive aggressionの日本語訳は、“向行動(行為)的攻撃”であるが、なじみが薄く、分かりにくいことから、これまで“道具的攻撃”という訳があてられている(坂井・山崎, 2003, 2004a, 2004b)。道具的攻撃として、instrumental aggressionが用いられた研究もある(e.g., Hartup, 1974)が、両者はほぼ同じ概念を表している(山崎, 2002)。

かってきている。ここでそれぞれの攻撃性を概括すると、まず、表出性攻撃とは、身体的攻撃や言語的攻撃などのように、怒りをそのまま表出するものを指す。そしてこの攻撃性は、学校からのドロップアウトや非行、犯罪行動などの外在的問題のリスク要因となっていることが示されている (Khartri et al., 2000; Vitaro, Brendgen, & Tremblay, 2002; Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oligny, 1998)。次に、怒り感情を感じているがそれを表に出せず、敵意やシニシズムを生む場合は不表出性攻撃となる。この攻撃性については、抑うつとの関連の高さが報告されている (坂井・山崎, 2003)。最後に、関係性攻撃とは、自分の目的を達成するために用いられる道具的攻撃 (Crick & Dodge, 1996) の一側面と考えることができる。仲間関係または仲間意識を操作することによって他者を傷つける行為として規定されており (Crick, 1995)、この場合、必ずしも怒り感情を伴わない。この攻撃性では、仲間拒否、抑うつ、そしてネガティブな自己観などの心理・社会的適応問題を同時に引き起こすこと、さらに将来の社会的不適応の予測因子であるという報告がなされている (Crick, 1997)。

それぞれの攻撃性が引き起こすこれらの問題の中で特に、児童において、将来的にも重大な適応・健康上の問題として、抑うつが挙げられる。例えば、抑うつに悩まされている子どもは、自尊感情が低く無力感をもち (Joiner & Barnett, 1994)、コミュニケーション方法、活動への参加、そして感情表現などの社会的行動において問題を示す傾向にある (Kendall, Cantwell, & Kazdin, 1989)。また、自殺願望が強く、その多くが成人してからうつ病になる可能性が高いことが指摘されている (Mitchell, McCauley, Burke, & Moss, 1988)。しかしこれまで、攻撃性を細分化して、それぞれの攻撃性の高さがどのように抑うつを導くか直接比較検討した研究は少ない。先に述べたように、それぞれの攻撃性にはその特徴に違いがあるため、攻撃性が高い児童もその攻撃性の種類によって、抑うつ

つを引き起こす過程も異なることが予想される。例えば、児童においては、怒りの表出は仲間からあまり支持されないので、表出性攻撃児では、その怒りの表出によって、仲間から孤立してしまい、その結果、抑うつが高まることが考えられる。これは関係性攻撃児においても、その攻撃性の高さから仲間拒否を受けているなら、同じ道筋が考えられる。他方、児童は、他のどの感情より怒り感情を隠そうとする (Underwood, 1997) が、同時に怒りのコントロールは難しいものと捉えており、怒りのコントロールに対する自己効力感が低い (Zeman & Shipman, 1997)。不表出性攻撃児では、怒りの表出を強く抑制しているが、依然として怒り感情は残っており、その怒り感情をコントロールできていないとしたら、それについてストレスを感じ、抑うつ感を高めると推測することができる。いずれにしても、それぞれの攻撃性の高い児童の抑うつを理解するためには、攻撃性の概念を細分化し、各攻撃性と抑うつの因果関係を調べることが重要である。

このことを検証した数少ない研究の一つに、坂井・山崎 (2003) がある。その結果では、攻撃性の高さが抑うつへ影響を及ぼしていたのは、不表出性攻撃のみであった。ただし、抑うつの測定法については、一考を要するだろう。先行研究 (坂井・山崎, 2003) で用いられた抑うつ尺度は、“生きていても仕方がないと思う”といった項目も含まれている (村田・清水・森・大島, 1996)、臨床アセスメントで用いられるような症状指向型の尺度であった。しかしこのような症状を、特に一般健常児が、日常的にそのように感じているとは考えにくく、一般健常児に対しては重篤すぎる。つまり、児童がより一般的に感じているレベルで、抑うつを捉えていくことが必要ではないかと考える。さらに、先行研究では、関係性攻撃および表出性攻撃にその関連が見られていないが、比較的軽いレベルの抑うつを捉えれば、関係性攻撃および表出性攻撃においても、その関連が見られるこ

とも考えられる。また、一般健常児に対するより予防的な観点から考えても、抑うつのより軽微な前段階を捉えることは重要となろう。

抑うつはこれまで、DSM-IVにおいて気分障害 (mood disorder) または感情障害 (affective disorder) と称され、感情状態にその症状が見られるとされてきた。そこで一般健常児においては、より日常的に誰もが感じる感情を測ることによって、将来、抑うつになるかもしれない児童をある程度捉えることができると推測できる。実際に抑うつや不安という内在的問題と感情の関係については、抑うつと不安に共通する負感情 (negative affect; NA) の亢進、抑うつ特有の正感情 (positive affect; PA) の低下、不安特有の生理的過覚醒症状の3つに分類した、3要因モデルが提唱されている (Clark & Watson, 1991; Watson, Clark, & Carey, 1988)。この3要因モデルについては、PAとNAの測度である PANAS (Positive and Negative Affect Schedule; Watson, Clark, & Tellegen, 1988) によって、成人において (Watson, Weber, Assenheimer, Clark, Strauss, & McCormick, 1995; Watson, Clark, Weber, Assenheimer, Strauss, & McCormick, 1995)、また PANAS の子ども版 PANAS-C (Laurent, Catanzaro, Joiner, Rudolph, Potter, Lambert, Osborne, & Gathright, 1999) を用いて、子どもにおいても (Laurent et al., 1999; Joiner, Catanzaro, & Laurent, 1996) 検証されている。さらに、臨床・非臨床群と対比して、抑うつと不安についての3要因モデルに関してレビューした研究において (Clark & Watson, 1991)、知的障害の診断にIQを用いるのと同様に、正負感情が、感情障害のレベルを定量化することができ、診断基準としてそれを用いることができるとことが示唆されている。

また、攻撃性とこのような適応・健康問題との関係において、より早い発達段階での予防的介入が重要であることが示唆されている (坂井・山崎, 2004a, 2004b)。現在では問題が表面化した段階で、治療的・対処的介入が行われることがほとん

どである。しかし、問題が表面化した段階では、介入していく者にとっても、問題を抱えた子どもにとっても、介入が困難になってしまうことが少なくない。むしろ、問題を引き起こす攻撃性の特徴を捉え、問題が顕在化する前に予防的な介入を行っていくことがより重要であろう。また、日本ではこのような予防的な観点から教育がなされることが少なく、その意味からも、早期介入の重要性を強調する必要がある。

以上のことより、攻撃性に対する1次予防の観点から、発達過程における早期の介入の重要性を考え、さらに、実際に介入を行う上で、すべての子どもを対象にして、効率的に実施できるという側面を考え、本研究の対象を、一般的な小学校の通常クラスに在籍している児童とする。また、本研究では、自記式質問紙を用いるため、4~6年生の児童を対象をしぼった。さらに、子どもの適応・健康上の問題との関連における重要性から、攻撃性を表出性攻撃、不表出攻撃、関係性攻撃の3つの攻撃性に細分化して扱う。そして特に、それぞれの攻撃性との関連が強い抑うつに着目する。またその際に、抑うつという重篤な症状より、日常的に一般健常児が感じる正負感情を用いることで、その前段階を捉えることとし、3タイプの攻撃性から正負感情への直接の因果関係を検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象者

本研究の調査対象者は、鹿児島県下の公立小学校6校の通常クラスに在籍する小学4~6年生832名であった。しかし、うち114名はデータに不備があり分析から除外したため、有効回答者数は718名 (男子353名、女子365名) となった。内訳は4年生189名 (男子96名、女子93名)、5年生275名 (男子131名、女子144名)、6年生254名 (男子126名、女子128名) であった。

2. 調査材料および手続き

攻撃性の測定には、信頼性、妥当性の確認された小学生用 P-R 攻撃性質問紙 (Proactive and Reactive Aggression Questionnaire for Elementary School Children: PRAQ-C; 坂井・山崎, 2004a) を使用した。下位尺度は表出性攻撃、不表出攻撃、関係性攻撃から成り、それぞれの下位尺度に対する 7 項目と無関項目 3 項目の計 24 項目について、「まったくあてはまらない (1 点)」から「とてもよくあてはまる (4 点)」までの 4 件法で回答を求める。各下位尺度得点は 7~28 点である。

正負感情の測定には、日本語版児童用正負感情尺度 (Positive and Negative Affect Schedule for Children: PANAS-C; Yamasaki, Katsuma, & Sakai, 2006) を用いた。この質問紙は、正感情および負感情の 2 因子から構成され、「ここ 2 週間にどんな気持ちを感じたか」について、「ほんのすこしか (またはまったく) 感じなかった (1 点)」から「とてもよく感じた (5 点)」までの 5 件法で回答を求め、得点範囲は各 12~60 点である。さらに信頼性については高い内的整合性 (Chronbach の α 係数: .83~.85) と安定性 (12 週間隔の相関係数: .55~.59) を示しており、抑うつと不安における Clark & Watson (1991) の 3 要因モデルを検証することによって、構成概念妥当性が確認されている。

調査は 2004 年 6~7 月にかけてクラス単位で行われた。調査に際して、実施校の校長およびクラスの担任から許可を得た。さらに、本調査が成績とは関係ないこととプライバシーは厳守される旨を記載した実施要項を質問紙と併せて担任に渡し、実施を依頼した。実施要項は担任から子どもたちに読み上げてもらった。質問紙は、データ識別のために出席番号だけを必ず記載してもらった。質問紙の順番は、日本語版 PANAS-C の後に、攻撃性質問紙 PRAQ-C であった。すべての質問項目への回答には約 15 分を要した。

Table 1 PANAS-C および PRAQ-C の平均得点 (標準偏差)

		男子	女子	<i>t</i> (<i>df</i> =715)
PANAS-C	PA	40.47 (9.09)	38.56 (9.18)	2.79**
	NA	27.97 (9.49)	29.28 (9.24)	1.88
PRAQ-C	表出性攻撃	16.63 (4.82)	16.40 (4.51)	.65
	不表出性攻撃	15.93 (5.12)	17.12 (4.80)	3.20**
	関係性攻撃	13.21 (4.40)	13.10 (3.82)	.36

** $p < .01$

Table 2 3 タイプの攻撃性および正負感情の相関関係

		I	II	III	IV	V
I	PA		.21**	.10	.04	.00
II	NA	.18**		.18**	.40**	.17**
III	表出性攻撃	-.02	.25**		.39**	.50**
IV	不表出性攻撃	.03	.49**	.37**		.42**
V	関係性攻撃	-.09	.19**	.47**	.35**	

注. 右上段は男子 ($n=353$), 左下段は女子 ($n=365$).

** $p < .01$

結 果

1. 攻撃性および正負感情の記述統計

PRAQ-C における表出性攻撃得点、不表出性攻撃得点、関係性攻撃得点、および PANAS-C における PA 得点、NA 得点について性別による t 検定を行った。その結果、不表出性攻撃得点において、男子よりも女子の方が有意に高く、PA 得点において、女子よりも男子の方が有意に高いという性差が見られた (Table 1)。

また、各尺度間の相関係数を男女ごとに Table 2 に示した。正負感情間および攻撃性間では互いに有意な正の相関を示し、攻撃性が高いほど NA が高かった。なお、PA と攻撃性の間には有意な相関は見られなかった。

2. 攻撃性の高低群による正負感情の差

児童本人の攻撃性がそれぞれ高い者とすべての攻撃性が低い者の高低群によって、正負感情に差があるかを検討した。分析に際し、各攻撃性の高い児童およびすべての攻撃性の低い児童を選別す

Table 3 各攻撃児の感情平均得点（標準偏差）

	高表出性攻撃児		高不表出性攻撃児		高関係性攻撃児		低攻撃児		主効果		交互作用 ⁺
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	攻撃 ^a	性	
PA	40.87 (9.33)	37.56 (9.74)	39.65 (8.77)	42.29 (8.83)	37.00 (5.86)	39.40 (5.93)	40.32 (10.65)	39.75 (9.55)	.88	.02	1.54
NA	25.16 (8.30)	23.64 (8.10)	29.93 (10.08)	31.06 (9.39)	24.70 (7.79)	25.07 (7.54)	22.83 (8.26)	24.57 (8.61)	10.49**	.15	.48

** $p<.01$, ⁺ F 値

^a多重比較の結果 NA：高不表出性攻撃児>高表出性攻撃児, 高不表出性攻撃児>高関係性攻撃児, 高不表出性攻撃児>低攻撃児

るため、中央値による分割を男女別に行った。表出性攻撃が中央値以上で不表出性攻撃および関係性攻撃が中央値未満の児童を高反応的表出性攻撃児、不表出性攻撃が中央値以上で表出性攻撃および関係性攻撃が中央値未満の児童を高不表出性攻撃児、関係性攻撃が中央値以上で表出性攻撃および不表出性攻撃が中央値未満の児童を高関係性攻撃児、3つの攻撃性すべてが中央値未満である児童を低攻撃児とした。その結果、高表出性攻撃児が男子31名、女子25名、高不表出性攻撃児が男子40名、女子35名、高関係性攻撃児が男子23名、女子15名、低攻撃児が男子66名、女子68名となった。

PAおよびNAそれぞれの得点について、児童本人の攻撃性（4群）×性（2群）の2要因分散分析を行った。分析結果をTable 3に示した。NAについて、有意な攻撃性の主効果が得られた。その後のScheffe法を用いた検定で、高不表出性攻撃児は、その他の高攻撃児や低攻撃児よりもネガティブな感情を感じていることが分かった。なお、PAにおける攻撃性の主効果、PA, NAにおける性の主効果および交互作用は有意ではなかった。

3. 共分散構造分析による攻撃性から正負感情への因果関係の検討

群差の分析から不表出性攻撃のみが強い児童に特徴的な結果が得られたが、実際に攻撃性から負感情への因果関係が存在するののかということとその関係性の方向を検証するため、因果モデルを構築し検討することとした。Figure 1は、3つの攻撃性が負感情に影響を与えるというモデルであり、

Figure 1 3タイプの攻撃性から負感情への因果モデル（観測変数、誤差変数および攪乱変数は省略されている）

Table 4 3タイプの攻撃性から負感情への因果係数と適合度

	表出性 (パス1)	不表出性 (パス2)	関係性 (パス3)	GFI	AGFI	RMSEA
男子	-.03	.47**	-.04	.91	.89	.03
女子	-.11	.58**	-.06	.91	.89	.03

** $p<.01$

このモデルを用いて、攻撃性（3）×負感情の共分散構造分析を男女ごとに行った。3つの攻撃性および負感情の観測変数については、それぞれの下位尺度に対する質問項目すべてを用いた。分析の結果として因果係数および適合度指標（GFI, AGFI, RMSEA）をTable 4に示した。適合度については、

基本モデル（誤差相関などをまったく想定しないモデル）より、さらに適切なモデルへ改良するために修正を行った。その際、修正指標を用い、同一尺度内についてのみ誤差相関（共分散）を仮定した。その結果、すべてのモデルで GFI, AGFI は .90, RMSEA が .03 以下の値となり、十分な適合を示した。

分析の結果、男女ともに群差の結果同様、不表出性攻撃から負感情へのパスが正の方向に有意であり、不表出性攻撃の高低が負感情に影響を及ぼしていることが分かった。なお、男女ともに、表出性攻撃および関係性攻撃への有意なパスは見られなかった。

考 察

記述統計において、まず特筆すべき点は、本研究で得られた攻撃性得点のうち、関係性攻撃得点に性差が見られなかったことである。この結果は、本邦における3タイプの攻撃性を同時に扱ったこれまでの知見と同様であった（坂井・山崎, 2003, 2004a, 2004b）。しかし欧米の研究では、関係性攻撃においては男女差が認められ、女子において顕著に見られる攻撃性であるとされている（Crick, 1995, 1997; Crick & Grotpeter, 1995; Crick & Werner, 1998）。このことは、本研究では自記式を用い、欧米の研究では他者評定が用いられているという攻撃性尺度の違いによる可能性もあるだろう。

さらに、正負感情尺度内の相関係数が低いながらも正の方向に有意であったことも着目すべき点である。本研究では、欧米で開発された尺度を再翻訳し、信頼性・妥当性の高い標準化された正負感情尺度（Yamasaki, Katsuma, & Sakai, 2006）を用いた。それにもかかわらず、正負感情間に相関はない、またはあっても負の方向という欧米の研究とは異なる結果であった。この現象は、日本版成人用 PANAS を用いた研究においても見られている（Yamasaki, Sakai, & Uchida, 2006）。

表出性攻撃、不表出性攻撃、関係性攻撃と正負

感情との関連について群差を調べた結果では、男女ともに、不表出性攻撃の高い児童が、負の感情を感じている傾向が強かった。また、実際に、不表出性攻撃の高さが、どの程度負感情に影響を及ぼしているかを検討するために共分散構造分析を行った結果、不表出性攻撃からのパスが男女ともに正の方向に有意であり、やはり、不表出性攻撃の高さが負の感情に影響を及ぼしていた。この結果は、3種の攻撃性から抑うつの影響を見た坂井・山崎（2003）と同様のものではあった。本研究では、抑うつのより前段階を捉えるものとして正負感情尺度を用いた。つまり、感情という児童がより一般的に感じているレベルにおいても、不表出性攻撃の高さが不健康・不適応な状態を導く可能性の高いことを示唆したとすることができるだろう。

児童期では、仲間関係の維持において感情の制御が重要な要件となっている（Lemerise & Dodge, 2000）。このことから、不表出性攻撃児は怒り感情を表出しないという点では、仲間から受け入れられるかもしれない。しかし、依然として本人の攻撃性は高いため、他者に対する敵意やシニシズムを生み、このアンビバレントな状態によって強いストレスを感じている可能性が高く、さらにその他全般の負感情も高まっている可能性が考えられる。Felsten（1996）は大学生においてではあるが、不表出性攻撃の高いものは、不満や衝動性があるにもかかわらず、低い主張性を持ち合わせているため、うまく怒りを表出できないことを示唆している。これらのことから、不表出性攻撃児に対しては、適切な感情の制御方法や主張性を身につけさせることによって、不表出性攻撃を低め、それらが導く不適応・不健康問題のための効果的な介入が期待できる。

また一方で、坂井・山崎（2003）と同様に、男女とも、表出性攻撃児および関係性攻撃児では、仲間にその攻撃性を認知されていれば、拒否され、そのことから抑うつを導くと予想したが、有意な

結果はどちらの攻撃性についても、得られなかった。これまで関係性攻撃については、抑うつとの正の関連を報告している研究もある。このような結果の違いについては、2つの理由が考えられる。Archer & Coyne (2005) は、関係性攻撃がより隠れたものであるほど、その攻撃者は社会的地位を促進させ、直接的であるほど、結果的には拒否されていくということを示唆している。このことから、1つ目には、本研究で捉えた関係性攻撃は、表だたないところで行われていたため、仲間拒否が起こっていなかった可能性が考えられる。2つ目としては、抑うつの測定方法によるものであることが考えられる。例えば、Crick (1997) については Child Behavior Checklist (CBCL) の教師評定版と自記式の Weinberger Adjustment Inventory (WAI) を用いているが、関係性攻撃との関連が見られたのは、教師評定においてのみであった。CBCL の教師評定の下位尺度は内在的問題を扱っており、抑うつそのものを測定している訳ではない。例えば、“何か悪いことをすることを恐れる”や“たくさん泣く”などの項目が含まれている。また、Crick & Grotpeter (1995) では、Children's Depression Inventory (CDI) を用いているが、倫理的な問題から尺度項目に2つの修正を加えている。ただし、修正後の尺度に対する妥当性は検討されておらず、抑うつ状態を正確に捉えているとは言い難い。さらに本研究では、抑うつよりも、日常的に児童が感じている正負感情を用いることで、表出性攻撃および関係性攻撃との関連性は見出される可能性を考えたが、先行研究の結果と同様となった。これらのことから、表出性攻撃および関係性攻撃については抑うつとの直接的な関連はない可能性が高いと言えるだろう。

正感情については、Clark & Watson (1991) の3要因モデルでは、抑うつ症状の特徴を正感情の低下としていることから、抑うつの前段階を正感情によっても予測できると本研究では考えた。しかし、正感情と全ての攻撃性との間には、統計的に

有意な関係は見られなかった。この結果については、本研究では通常クラス在籍児を対象としていることから、正感情は、抑うつという病的な段階を捉えることができるものの、抑うつには至っていない前段階を反映しないことが考えられる。このことについては、Laurent et al. (1999) が、一般健常児と臨床群との間に正感情について有意差を見出さなかったことから示唆されよう。

これまで攻撃性については、非行や問題行動などの外在的な問題の要因としてクローズアップされ、それを低減し、さらに適切な行動へと導くように適正化するための教育プログラムが盛んに開発されてきた (e.g., Aggression Replacement Training: ART, Goldstein, Glick, & Gibbs, 1998; Psychological Health Education in Elementary-school Classes by Schoolteachers: PHEECs, 山崎, 2000)。外在性の問題は、実際の行動が表面に現れるため、問題視されやすい。しかし、児童生徒が抱える問題の一つとして、近年抑うつが着目され、その要因として不表出性攻撃との関連が見出されている (坂井・山崎, 2003)。確かに、不表出性攻撃児については、その性質のために、学校現場でもあまり目立たず、今まで軽視される風潮があった。しかし一方で、いわゆる「キレる」という現象は、怒り感情が十分に処理できていない不表出性攻撃傾向が長期に渡り、急に極端な表出性攻撃に至ったものである可能性も指摘されている (山崎, 2002)。これらのことから、今後、これらの内在的な問題にも着目した改善プログラムの開発が望まれる。

また、本研究で得られた結果から、学校現場における内在的問題に対するスクリーニングの可能性が考えられる。スクリーニングについては、他の子との区別をうんだり、まだ外在化していない問題を表面化させてしまうという懸念もある。しかし、先述のとおり、内在的問題は表面上では目立たず、将来的にも継続していく。問題を顕在化する前に防いだり、問題が大きくまたは深刻化す

る前に対処していくという予防的観点からのスクリーニングとして、負感情の測定を用いることができるだろう。

引用文献

- Archer, J., & Coyne, S. M. (2005). An integrated review of indirect, relational, and social aggression. *Personality and Social Psychology Review*, **9**, 212–230.
- Clark, L. A., & Watson, D. (1991). Tripartite model of anxiety and depression: Psychometric evidence and taxonomic implications. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 316–336.
- Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Developmental Psychopathology*, **7**, 313–322.
- Crick, N. R. (1997). Engagement in gender normative versus nonnormative forms of aggression: Links to social-psychological adjustment. *Developmental Psychology*, **33**, 610–617.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1996). Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, **67**, 401–413.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710–722.
- Crick, N. R., & Werner, N. E. (1998). Response decision processes in relational and overt aggression. *Child Development*, **69**, 1630–1639.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **6**, 1146–1158.
- Felsten, G. (1996). Five-factor analysis of Buss-Durkee Hostility Inventory neurotic hostility and expressive hostility factors: Implications for health psychology. *Journal of Personality Assessment*, **67**, 179–194.
- Goldstein, A. P., Glick, B., & Gibbs, J. C. (1998). *Aggression replacement training: A comprehensive intervention for aggressive youth*. Champaign, IL, US: Research Press.
- Hartup, W. W. (1974). Aggression in childhood: Developmental perspectives. *American Psychologist*, **29**, 336–341.
- Joiner, T. E., Jr., & Barnett, J. (1994). A test of interpersonal theory of depression in children and adolescents using a projective technique. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **22**, 595–609.
- Joiner, T. E., Jr., Catanzaro, S. J., & Laurent, J. (1996). Tripartite structure of positive and negative affect, depression, and anxiety in child and adolescent psychiatric inpatients. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 401–409.
- Kendall, P. C., Cantwell, D. P., & Kazdin, A. E. (1989). Depression in children and adolescents: Assessment issues and recommendations. *Cognitive Therapy and Research*, **13**, 109–146.
- Khartri, P., Kupersmidt, J. B., & Patterson, C. (2000). Aggression and peer victimization as predictors of delinquent behavioral and emotional adjustment. *Aggressive Behavior*, **26**, 345–358.
- Laurent, J., Catanzaro, S. J., Joiner, T. E., Jr., Rudolph, K. D., Potter, K. I., Lambert, S., Osborne, L., & Gathright, T. (1999). A measure of positive and negative affect for children: Scale development and preliminary validation. *Psychological Assessment*, **11**, 326–338.
- Lemerise, E. A., & Dodge, K. A. (2000). The development of anger and hostile interactions. In M. Lewis, & J. M. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions*. 2nd ed. New York: Guilford Press. pp. 594–606.
- Mitchell, J., McCauley, E., Burke, P. M., & Moss, S. J. (1988). Phenomenology of depression in children and adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **27**, 12–20.
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 (1996). 学校における子どものうつ病——Birlesonの小児期うつ病スケールからの検討——最新精神医学, **1**, 131–138.
- Quiggle, N. L., Garber, J., Panak, W. E., & Dodge, K. A. (1992). Social information processing in aggressive and depressed children. *Child Development*, **63**, 1305–1320.
- 坂井明子・山崎勝之 (2003). 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響 学校保健研究, **45**, 65–75.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004a). 小学校における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予測に及ぼす影響 教育心理学研究, **52**, 298–309.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004b). 小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, **75**, 254–261.
- Underwood, M. K. (1997). Peer social status and children's understanding of the expression and control of positive and negative emotions. *Merrill-Palmer Quarterly*, **43**, 610–634.
- Vitaro, F., Brendgen, M., & Tremblay, R. E. (2002). Reactively and proactively aggressive children: Antecedent and subsequent characteristics. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **43**, 495–505.

- Vitaro, F., Gendreau, P. L., Tremblay, R. E., & Oligny, P. (1998). Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problem. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **39**, 377-385.
- Vitiello, B., & Stoff, D. M. (1997). Subtypes of aggression and their relevance to child psychiatry. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **36**, 307-315.
- Watson, D., Clark, L. A., & Carey, G. (1988). Positive and negative affectivity and their relation to anxiety and depressive disorders. *Journal of Abnormal Psychology*, **97**, 346-353.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measure of positive and negative affect: The PANAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.
- Watson, D., Clark, L. A., Weber, K., Assenheimer, J. S., Strauss, M. E., & McCormick, R. A. (1995). Testing a tripartite model: II. Exploring the symptom structure of anxiety and depression in student, adult, and patient samples. *Journal of Abnormal Psychology*, **104**, 15-25.
- Watson, D., Weber, K., Assenheimer, J. S., Clark, L. A., Strauss, M. E., & McCormick, R. A. (1995). Testing a tripartite model: I. Evaluating the convergent and discriminant validity of anxiety and depression symptom scales. *Journal of Abnormal Psychology*, **104**, 3-14.
- 山崎勝之（編著）（2000）．心の健康教育——子どもを守り，学校を立て直す—— 星和書店
- 山崎勝之（2002）．発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎勝之・島井哲志（編） 攻撃性の行動科学——発達・教育編—— ナカニシヤ出版 pp. 19-37.
- Yamasaki, K., Katsuma, R., & Sakai, A. (2006). Development of a Japanese version of the Positive and Negative Affect Schedule for Children (PANAS-C). *Psychological Reports*, **99**, 535-546.
- Yamasaki, K., & Nishida, N. (2007). The relationship between three types of aggression and peer relations in elementary school children. *International Journal of Psychology*, in press.
- Yamasaki, K., Sakai, A., & Uchida, K. (2006). A longitudinal study of the relationship between positive affect and both problem- and emotion-focused coping strategies. *Social Behavior and Personality*, **34**, 499-510.
- Zeman, J., & Shipman, K. (1997). Social-contextual influences on expectancies for managing anger and sadness: The transition from middle childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, **33**, 917-924.

— 2006.6.28 受稿，2007.3.28 受理—

Three Types of Aggressiveness and Positive and Negative Affect in Elementary School Children

Lisa KATSUMA¹ and Katsuyuki YAMASAKI²

¹Joint Graduate School of School Education, Hyogo University of Teacher Education

²Department of Human Development, Naruto University of Education

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 16, No. 1, 47-55

This study examined the relationship between three types of aggressiveness: reactive-expressive, reactive-inexpressive, and proactive-relational, and positive and negative affect in elementary school children. The Japanese versions of Positive and Negative Affect Schedule for Children (PANAS-C) and Proactive-Reactive Aggression Questionnaire for Children (PRAQ-C) were administered to 718 children of fourth through sixth grades. Results revealed that, compared with non-aggressive children, inexpressively aggressive children showed higher Negative Affect. No such relationship was found for those of the other aggressiveness types. This finding was consistent with previous ones, underscoring the problematic characteristics of inexpressive aggressiveness. The possibility that Negative Affect could be used for screening children with future depression symptoms is also discussed.

Key words: reactive-expressive aggressiveness, reactive-inexpressive aggressiveness, proactive-relational aggressiveness, positive and negative affect